

東京工業大学歌

三好達治 作詞
諸井三郎 作曲
昭和31年(1956)制定

一 逝くものは 斯のごときか
長江は 昼と夜となし
はるけき日 ゆかしきさを
指す方の はた窮みなき
嘆じてん 聖さびはや

二 悠久の 黄金の環
めぐりくる陽は久方ゆ
青春の園生にたらふ
手力はわがもろ腕に
重き扉をいざ若人よ

三 くろがねの 扉を開け
工人よ 窮理者よ友
かつは見よ みどりの木の間に
すばる星 灯を点じたり
友垣が 七つの窓べ

四 七彩の ものの 文すべ
ただ光 彼方に白し
さやかなり 月毛なりかし
騎してゆけ はるけくもこそ
大き岡 こえていく岡

現代語訳

男声合唱団シュヴァルベンコール
(顧問：高橋幸雄名誉教授)

一 流れゆくものは このようなものか
大河は (そして東工大の伝統は) 昼も夜も流れ続ける (注1)
遠い日 (蔵前工業の時代) なつかしい勇者 (先輩) たちが
目指していた方向の なんと窮み (はて) のないことか
賞賛しよう 聖人のようだ

二 想像もつかないほどの昔から続く 黄金のリング
毎日めぐってくる太陽は 昔も今も変わらない (注2)
(東工大という) 青春をはぐくむ学園で活躍するに相応しい
手力 (力量) が (今の) われわれの両腕にはある
重い扉を (開けよう) さあ若人よ

三 (黒い重い) 鉄の扉を開けよ (注3)
工学を志す者よ 真理を追究する者よ わが友
そして見よ 緑の木の間に
すばる星が 灯をともした (注4)
われらの友が 七つの窓で

四 七つの光とりどりの学術よ (注5)
まっすぐにさす光の先に 白く輝くものがみえる
明るくはっきりとみえる 月毛色 (赤みがかった白色) の
馬 (本館) だ (注6)
その馬に乗っていけ はるか遠くまで
大きな岡を いくつも越えて (注7)

平成22年5月1日改訂

現代語訳注

(注1) 東工大の前身である東京高等工業学校は、隅田川のほとり、浅草の近く、蔵前の地にあった。「大河」は隅田川の連想である。大岡山に移転したのは関東大震災の直後の大正13年、東京工業大学になったのは昭和4年である。冒頭の2行は孔子が川のほとりで詠んだ「逝くものは斯くの如きか、昼夜を舍かず」を踏まえ、人間の流れも、そして東工大の伝統も、大河のように絶えず流れ流れながら、いろいろな困難を乗り越え、大海を目指していく、ということを暗示していると思われる。

(注2) したがって偉大な先輩達と同じ血がわれわれの身体にも流れている、と言いたいのであろう。

(注3) 当時の正門は、重い観音開きの鉄の扉であった。記録によると、作詞の段階でははじめは「扉を押し開け」であったが、作曲の都合で「扉を開け」に変更された。

(注4) すばる星とはプレアデス星団の和名である。なお、昭和35年に東工大の自動車チームが軽自動車「スバル」でマルセーユからモスクワまで15,000Kmの大陸横断を成し遂げた。これは当時のわが国の技術水準の高さを示す快挙であった。

(注5) 「ものの文すべ」の「すべ」は漢字で「術」である。作曲当時の学部は10学科、大学院は7専攻であった。

(注6) 周囲の建物や立木を全部取り除いてスロープの下、グラウンドあたりから本館を眺めることを想像して欲しい (昔の写真にそのような写し方をしたものがある)。すると本館は月毛色の、頭を高くあげた、分厚い胸のがっしりとした馬に見えてくる。

(注7) もちろんこれは「大岡山」を連想している。